

合格率を上げる過去問の使い方



河合塾マナビス向ヶ丘遊園校

河合塾マナビス

■ 過去問を解く目的

- ゴールの位置を知る
- 自分の位置を知る

■ 過去問を解く前に

●「具体的な目標」を立てる

- 自分の得意・苦手の分野ごと、あるいは学習進度に応じて具体的に立てる
 - 例：日本史で江戸時代までしか固められていない
 - ◆ 江戸時代までの範囲の問題は7割を目指す
- 学校の授業進度によって、過去問で出題される範囲をまだ終わっていない高1・高2生が過去問を解く場合
 - 例：文法問題は5割を目指す

それぞれの学習進度に応じた、具体的な目標を立てる！

■ 過去問を解くときに意識すべきこと

● 時間制限を気にしすぎない

- 過去問演習を始めて間もない頃に意識してほしいことで、理由は時間内に解こうとすると自分の実力が正確にわからなくなるため。
- 難関大学の入試問題は時間制限が厳しく、受験生のレベルも高いため、知識量では差がつきにくい。
- 「じゃあ、どこで差をつけるのか。」
 - **処理速度**で差がつく。時間内で自分の知識を活用して、いかに早く問題を処理できるかで差をつける
- 無理に時間内で解き終えようとする、英語や国語は読み方が崩れる
- **処理速度で勝負する前に、知識で合格ラインに立てるように**
 - 時間制限を気にせず解くことで、身につけた知識をフル活用すると何割解けたがわかるので、知識レベルでの現状の立ち位置が分かる
- はじめは時間無制限でも構わないが、本番は試験時間が必ず存在するので、「時間内で解き終わるように挑むが、解き終わりそうにないときは延長して良い」というマインドで取り組む。
- 本格的に時間内で解くことを意識するタイミングは、「**時間かければ合格点が取れる**」というレベルになってから
 - 時間をかけても合格点が取れないのであれば、時間内で合格点を取れない。

■ 過去問を解くときに意識すべきこと

● 解答の根拠に印をつけながら解く

- ほとんどの受験生ができていないこと
- 問題用紙になぜその解答を選んだのかをメモしておかないと、後から見直したときに「何でこれ選んだんだっけ？」となってしまう。
- 過去問演習は「**今の自分に足りない知識は何かをあぶり出すため**」に取り組むもので、高い点数を取って満足するものではない。
- 解答の根拠をメモしておかないと間違えたときに、足りない知識を突き止められない。
- 過去問演習はする際は、「なぜその答えになったのか」、「どこで迷ったのか」など解答の根拠やつまづく箇所に印をつける

● 過去問は1日で全科目を解く必要なし

- 一気に全科目を解いて分析がおろそかになるなら、1日1科目ずつ全力で解いて分析をきっちり行うのが良い。

■ 点数を出そう

● 過去問には配点が記載されていないけど・・・

- 過去問の点数の算出は悩みの種
- 点数の算出を間違えると、合格点とのギャップがずれてしまい、正確な自分の立ち位置がわからなくなる
- 過去問の結果はパーセンテージや何割かで算出するのではなく、**必ず点数で算出すること**
- 合格点との差分を定量的に把握でき、あとどの問題が正解できれば合格点が取れるのかというイメージが出来る
 - **より勉強に身が入る**

● 点数の算出方法

- 問題の配点は、「満点÷問題数」ではなく、模試の配点や過去問の難易度を参考に、大体の配点を予想して点数を割り出す
- 例えば、1問1点で計算したうえで、残りの点数を配分していく方法もある
- 記述問題の場合、マーク式の問題と比べて配点が1.5倍～2倍になることが多い。部分点も模試の解説や過去問の解説を参考に点数を出してみる。

■【超重要】分析の仕方

● 科目全体の点数だけでなく分野ごとの点数も出そう

- 自分の得意・不得意分野を把握できるため
 - 例えば英語の場合、整序、読解、会話文など分野ごとに点数を出すことで、自分に足りない知識を感覚的にではなく、定量的に特定することができる
 - 何回か演習をこなすと、平均的な点数が見えてくる
- 成長をより細かに感じることができるため
 - 足りない知識の対策をした後の過去問演習で、科目全体の点数だけだと見えづらかった成長が、分野ごとに点数を出すことで、目に見える形で成長を実感できる
 - $+\alpha$ で予想の配点をもとに分野ごとにそれぞれ、「この問題が出来るようになれば合格点に届く」という問題が洗い出せれば、より明確にゴールを意識できる
 - 過去問分析において足りない知識を特定するだけではなく、ゴールをより鮮明にすることや、成長を感じられることも重要

■【超重要】分析の仕方

- 間違えた問題は「なぜなぜ分析」をして原因を突き止めよう
 - 間違えた問題に対して、「なぜ？」を繰り返して根本的な原因を突き止める
 - 例えば、英語の内容一致問題があった場合、それをただ英文が正確に読めてなかったのが原因で問題を間違えてしまった**だけで終わらせてはいけない**
 - 「**なぜ内容を読み取れなかったのか？**」を「なぜ？」を繰り返して深く分析する
 - 内容を読み取れなかった原因が、**単純に読解力がなかったというのではなく、ある単語、もしくは文法知識が欠けていただけだった**という場合がよくあるからである。一概に原因を決めつけるのではなく、「なぜ？」を繰り返して原因を突き止めよう
 - なぜなぜ分析のコツは「客観的に見ること」
 - 自分の解答を他人の解答に見立てて、「なぜ間違えているのか」、「何の力が足りなかったのか」を正しく把握しよう

■【超重要】分析の仕方

- 分析が終わったら次の目標点数を決めて計画を立てよう
 - 次の目標点数を達成するためにいつまでに、どの知識を、どの教材で強化すればいいかを明確にして計画を立てる
 - 目標を立てるうえで、まだまだ合格点まで遠いときは、「どうすればプラス1割が取れるようになるか」を考えよう。
 - 次の過去問演習で目標に対して足りない知識のギャップがちゃんと埋まっているかを確認する。この繰り返しで合格点に近づける

■ 過去問の分析は徹底的に

● ゴールの位置を知る

- 過去問は受験勉強をはじめたときに、一度解いてみる
- ある程度点数が取れるようになってから過去問に取り組むは間違い。勇気を出して挑もう。
- 最初に自分のゴールを明確にしておく、精度の高い勉強計画を立てやすい。

● 自分の位置を知る

- ゴールの位置を知れた後は、過去問は自分の位置を知るために活用する。
- ゴールに対して、自分はどの位置にいるのか。前回よりも近づいているか。
- 自分の位置を知り、ゴールとのギャップを明確にすることで、いつまでにどの勉強を完了させた方が良いか、より精度の高い勉強計画を立てられる。

■ 過去問は何年分解いた方が良いか

● 第一志望校は10年分

- 大学によっては入試問題の傾向が変わっている場合があるので、基本は最新年度から解くのが鉄則。
- マナビスの過去問研究講座なら最大10年分の過去問を解くことができる！
- 時間に余裕がない人は5年分は必ず実施。

● 併願校は3年～5年分

- 過去問を解かずに試験本番に臨んではいけない
- 赤本1冊分の分量は絶対にやりきる